

【実施報告】

第36回オンラインセミナー

「北欧の地方自治体～北欧5か国の選挙啓発活動や主権者教育～」

第36回目のセミナーでは、北欧・国際比較文化ジャーナリスト、ノルウェー国際報道協会役員、写真家として活躍されている鑑麻樹氏をお迎えし、北欧における選挙啓発活動や主権者教育の取り組みをテーマにご講演いただいた。

セミナーの主な内容について、以下のとおり報告する。

1 概要

- 日 時：2024年5月16日（木）18時00分から19時30分まで（日本時間）
- 当日参加者数：91名（申込者数：221名）
- プログラム：①開会挨拶・講師紹介 (18:00～18:05)
- ②講演 (18:05～19:20)
- ③質疑応答 (19:20～19:30)

2 講演内容

<北欧の自治体は元気>

- ・北欧はとにかく世界初の〇〇、国内初の〇〇といった前例になりたがり、それを目標に動いている。これは企業も自治体も国も、全体的にこのようなマインドセットが北欧では深く根付いている。
- ・例えば、北欧の自治体では、今世界で求められている気候や環境対策等、非常に急いで国内初の〇〇になりたがる。「ノルウェー国内初の公共バスを全て電動化した町」等、そういった「初」になりたがる。
- ・国は、そのような自治体での成功事例や試験的プロジェクトを見て、これをちょっと変えてみて国でもやってみようかなと、自治体でやってきたことが国レベルの取り組みになり、その国レベルの取り組みが、よく北欧モデルとして世界的にも報道されるというパターンが多い。
- ・つまり自治体が、世界で関心を持たれている北欧モデルを作っている発信地である。
- ・北欧やその自治体というのは世界にとっての社会の実験室であるラボ的な存在にあたるのではないかと思っている。やはり北欧は人口が少なく規模も小さい国なので、アメリカや日本ではすぐには取り組みめないような試験的プロジェクトを小さな北欧の自治体は先に取り組んでくれる。そこから私たちは、北欧の自治体の学びや課題点をモデルにすることができる。
- ・また自治体は、市民やメディアとコミュニケーションをしながら都市開発や政策作りを進めている。この市民の中には子どもや若者、有権者、移民等も含まれているのが特徴。

Q 今、日本の自治体は、人口減少が人口の取り合いという形で課題になっている。北欧には国全体の課題や視点等で特に自治体を感じているものはあるか。

A 北欧は平等を大事にする国々なので、特定の権力が首都や大きい街だけに集中することをとにかく嫌がる。そのため、新しい組織や機関を作る時はできる限り地方自治体に点在させようとする傾向がある。自治体全体の課題となっているのは、地方の自治体に行けば行くほど、その病院のシステム等が首都等大きい都市に比べて、サービスや優秀な人材等の提供が下がりがちになってしまうことである。人口の取り合いはしてはいない。ノルウェーは山やフィヨルドが多いので、中心部から離れた自治体に行けば行くほど、もともと人口が少ない。その人口が少ないところに、いかにすれば大都市でも体験できるようなサービスを維持できるかという点が課題になっている。

- ・写真（講演資料参照）を見ていく中で皆さんの心に留めていただきたい質問が4つある。
「みなさんの自治体は若者・子どもが安心できる環境を提供していますか？」
「教室の外に民主的な対話を体験できる場を提供していますか？」
「世界や社会で起きていることを自分で考えるという機会を提供していますか？」
「みなさんの自治体の決定プロセスのテーブルに若者や子どもは座っていますか？」

<北欧と日本の物事の話し合い方の違い>

- ・皆さんの決定のテーブルに若者や子どもは座っているか、と尋ねたが、北欧と日本の物事の進み方のスピードの違いを話す時にある事例を出している。
- ・北欧と日本の違いをイラストで表すと、北欧は丸いテーブル型の円形のテーブルであり、日本はテーブルの形が縦に長い長方形である。これが意味するものは、イラストのとおり北欧モデルの円形型のテーブルにはたくさんの人が座っており、若い人や移民の人、高齢者、車椅子に座っている人等色々な人がいて、誰がそもそも司会者でリーダーなのかも分からないような状況。服装も好きな格好をしている。そしてこの物事を話し合うテーブルは何が起きているかを外から自由に見ることができる。外とテーブルの間に壁はない。外から見ている人たちは「ちょっと私も意見があるから座っていいですか？」と椅子を交換することができ、椅子に座っていた人も「私はもう十分に座ったから今度はあなたが座ってください」と譲る。これが北欧の円形型である。
- ・日本の長方形テーブルは、上座と下座という言葉が日本語にあるように、誰が上の立場で誰が下の立場もしくは新しく入ってきたばかりの人なのか明確に分かる。スーツを着てかしこまった服装をしている。そして女性は少ない、もしくは女性がいないこともある。移民背景のある人や若い人はこの椅子にはほとんど座っていない。またこの空間に入るためには特殊な権利が必要。ドアを開けるためには鍵が必要だったりパスワードが必要だったり何か権利を持っていないと入ることができない。またこのドアまでの道のりには階段等があり、車椅子等で移動している人にとってはほぼ入ることが不可能。そしてこの物事を決定しているテーブルのある空間は壁で囲われ、中でどのような話し合いがなされているのか、外側の人から見ることはできず、透明性等はあまり見られない。これを日本の長方形型の事例だと説明している。

- ・北欧はこの円形型のテーブルで皆自由に話しているので、社会全体のデジタル化等も進みやすいということに実は関係している。

Q 結論や議論を誰がリードしていくかを気にせずとも進んでいくものか。

A もちろん司会者みたいな人はいるが、まず、誰が司会者なのか外見では分からない。司会者は、日本と比べると、もっと出席者の意見を聞き、皆の意見にまず耳を傾けている。日本だと、上の立場の人が話して、新しく入ったばかりの人や下の立場の人は圧倒的に聞いているだけの人が多い受動的な印象がある。しかし北欧の場合、出席者は常に喋って、できる限り議論の場に座っている皆が意見を言うことが本当に大事にされている。だから結論が出るまでの時間はかかる。時間はかかるが、これが北欧が大事にしているもの。最終的に皆が妥協して結論が出る。この「妥協するスキル」というのが北欧では大事な人材のスキルである。リーダーに1番必要とされるスキルは妥協するスキルである。

<自治体の事例①ノルウェー・クリスチャーサン>

- ・写真はクリスチャーサンというオスロから飛行機で45分ほど離れた場所にある町。大きい都市ではなく、ノルウェーでは避暑地のような小さな町。
- ・クリスチャーサンにはクンストサイロという新しい北欧の現代美術館がある。
- ・現在ノルウェーではこれが大きな話題になっている。クンストサイロがやっとオープンしたという雰囲気。なぜ「ついに」「やっと」オープンしたと言うのかというと、どのようにお金を集めてクンストサイロをオープンさせるか、この小さな町に建てる美術館について何年間も国全体で議論してきたからである。
- ・美術館オープンのきっかけは、ニコライサイゲン氏というノルウェー銀行のCEOが数年前に、自分の地元であるクリスチャーサンにアートを1,000点以上寄贈すると発言したことが始まりである。クリスチャーサン市としては、それはとても嬉しい申し出だったが、飾る場所として新しい美術を建てた方がよいという話になり、昔、飢餓の対策のために穀物を保存していたサイロを改修工事してここを現代美術館にしようということになった。
- ・このサイロは、以前クリスチャーサンの市民の間では「この古びて使われていないサイロは、なんて醜い建物なんだ」と言われていたような場所。それを改装し、美しくして美術館にすることとなった。
- ・次に、「お金をどう集めるか」という議論が起こった。国と自治体がどれだけ費用を出すか、ニコライサイゲン氏がお金持ちなので彼が出せばいいのではないかといった議論が始まり、政府のお金、つまり私たち皆の税金を使うプロジェクトということで、これはクリスチャーサン内の議論ではなく、国全体の議論に発展した。これはノルウェーによくある流れである。面白いのが、この議論に子どもを含め皆が参加することである。子どももメディアも皆盛り上がり何年間も議論した。北欧は社会主義的な傾向があるので、日本では考えられないことだが、民間経営をとにかく嫌がり、国や自治体といった公立・公共の運営の方が好まれる。だから人によっては、「ニコライサイゲン氏がお金持ちなのだから彼が出せばいいじゃないか」という人もいれば、「いや、今後このクンストサイロが在り続けるのであれ

ば、民間がつくる場所ではなくて、もっと国や自治体がお金を出して、皆のものという場所にしておいた方がいいのではないか」というような議論もあった。

- ・自分が学生だった時、地元の美術館や文化施設が建設される際に、その議論に自分が参加できたか。「この位置に建てるべき」「施設の中にどれだけ飲食店や映画館といった他のサービスを入れるか」といった議論に自分も関われるのだという感覚。日本ではそのような感覚は得られなかったと思う。しかし、北欧だとそれが可能で、その意見が新聞等に掲載されることもあり、とにかく皆で議論をしている。
- ・このように皆で議論して、反対も批判もするため、プロジェクトはまず遅れる。予定した年には完成しないが、遅れてもいいから皆で話し合っ意見を出し合っ、最後の妥協の形を見つけていこうというこのプロセスがすごい。北欧では小学生でさえ「この位置に建てた方がいいと思う」とか、「もっと子どもたちが遊べる場所を作って欲しい」、「自転車でも行けるように駐輪スペースも欲しい」と議論に参加でき、主権者教育ができています。

Q 日本語の「妥協する」は我慢するイメージもある。妥協するスキルについて補足をお願いしたい。

A 北欧では、子どもや若者が話し合いのプロセスに参加していること、一緒にテーブルに座っているのは民主的・人権として当たり前感覚である。若者を話し合いのテーブルから外すことは民主的なプロセスではないので批判される。いろんな人がいてこそ民主的であると言える。北欧では、「それこそが民主的」「それだと民主的じゃない」という発言を驚くほど耳にする。子どもに妥協するのではなく、子どもが話し合いのプロセスに入るのは民主主義として当たり前、民主国家として当たり前なこと。妥協スキルするというのは、リーダーや権力のある人に求められるスキルである。妥協するスキルがない人は、まず社長やリーダーとなる立場にはなっって欲しいとも思われていない。また、妥協するスキルがない人がリーダーシップをとるべきではないと思われている。北欧のリーダーシップというのは、物事の決定時に、部下や仲間、外部の人の話を聞いて、自分の考えを変えていき、妥協して皆の意見を取り込んで、考えを新しい形に変えていける人こそがリーダーにふさわしい人とされている。北欧は大きい政党が権力を持っているような国ではなく、小さな政党がグループになっって連立政権を立てる。小さい政党の集まりだと優先したい政策が各党で異なるので、一緒にテーブルに座っって一緒に国家予算案を作るのは非常に大変な作業である。つまり、各政党の党首が妥協しない限りは絶対に国家予算が作れない。そのため、高い妥協するスキルを持つ人たちが党首として集まり、皆でテーブルに座り、妥協し合っって国家予算を作るので、国家予算を発表する時に、妥協の結果であることを皆誇らしげにしている。「妥協する」は北欧では非常にポジティブな言葉である。

<自治体の事例②ノルウェー・オスロ>

- ・写真はノルウェーのオスロにあるノーベル平和センターである。ノーベル賞というとスウェーデンを連想するが、平和賞だけはノルウェーで決定し、セレモニーを行っている。センターでは平和賞受賞者の歴史等を展示している。ノーベル平和センター、オスロの公共図書館

やオスロ市、福祉局（国の機関の一つ）が連携して、「オスロは話す」というイベントを行った。

- ・イベントでは、テーブルに市民が1対1で座っているが、彼らはお互いのことを知らない。唯一知っているのは、私たちは意見が絶対違う、ということである。事前のアンケート、例えば、最近CO2排出量が高くなっているから肉を食べる量を減らしてもっと野菜を食べるべきだという考えに賛成か反対か、という問いに対して、意見が異なる人たちを機械的に選んでペアが作られている。このイベントは、意見が異なる人と、座って対話をしてみようという取り組み。実は今、欧州全体で、「建設的な議論はいかにすればできるだろうか」ということをメディアや自治体等が注目している。その理由は、インターネットやSNS上で分断が起きているからである。インターネットやSNSで見る他人の発言に、「意見が違う人が多くてなんかもう嫌だ」「この人とはもう話したくない」「話してみたいが怖そうだな」等のイメージを抱くことがあると思う。このような現代社会において、どのようにすれば建設的な議論が行えるのかが注目されている。
- ・このイベントは、オスロ市と公共の図書館やノーベル平和センター、また国の組織も関わっているため安心して対話ができる空間を提供している良い事例である。このような場所だと行政職員がいる空間なので、市民は安心して話すことができる。実際話してみると意見は異なるが、相手がこのような考えに至るまでには家族背景やいろいろな出来事があったのかということが分かり、各ペアは笑顔で話を続けていた。分断社会をこれからどうしていくかという現代にこの取り組みの事例は非常に良い事例。ここで重要なのが、自治体がこの空間を提供していることである。それによって市民も安心してこの場所に来ることができる。そもそも自分と意見が異なる人が目の前に座る前提でその場所に行くこと自体、緊張するものだが、このように国や自治体が提供する場所であることで、安心して、建設的で、民主的な対話ができる。今、分断社会と言われている中で、自治体が行う一例だと思っている。

<投票率>

- ・国政選挙の投票率は70～80%前後、自治体の選挙だと60～70%前後。日本と比較すると高いように思うが、現地では、昔に比べて低くなっていることが問題視され、投票率が高いと意識している人は少ないのが現状。
- ・北欧には、オーランド議会や先住民からなるサーミ議会等もある。
- ・妥協とコンセンサスが北欧で求められているリーダーシップ。
- ・また、北欧の中の違いとして、ノルウェー、デンマーク、スウェーデンは国王がいる国で、フィンランドとアイスランドは大統領がいる。今年はフィンランドとアイスランドで大統領選がある。
- ・北欧は比例代表制である。小さい政党同士がグループを組んで連立政権をとり、また、連立政権で大多数が取れない時は、外側から一緒に協力する閣外協力という形で政治が作られている。

Q 北欧では選挙制度はおおよそ共通しているという風に捉えてよろしいか。特に北欧の中で際立った違いがあるか。

A 似ている。比例代表制なので基本的に政党に投票する。自分の考えに最も近い党に投票するようになる。ただ、フィンランドとアイスランドだけは、政党に投票するのに加え、ある1人の立候補者に投票する形になる。

- ・自分の考えに最も近い政党はどこになるかを考えることが非常に大事になる。特に北欧は小さな政党がたくさんあり、新しい政党がどんどん登場するため、その時の自分にとって1番考えが近い政党に投票先を変えることも当たり前である。そのため、人々はまず、自分の考えに近い政党を選ぶことに必死になる。

<ノルウェーの選挙期間の様子等>

- ・写真はノルウェーの首都オスロ。投票日から1ヶ月前頃に大通り等に各政党がスタンドを立てる。私はこれを選挙小屋と呼んでいる。
- ・選挙小屋というのは、政治のおしゃべりができるカフェのような場所である。写真を見て分かるように若い人がたくさん立ち寄っている。この選挙小屋では驚くほど何をしてもよく、お金を配らない限りは何を配ってもよいことになっている。どの政党も予算がある限りで、パン、チョコレート、ワッフルといった食べ物等に限らず、文房具やシャボン玉といった子どもが喜ぶようなおもちゃ等何でも配ってよい。しかし、これが1票になるとは誰も思っていない。
- ・なぜパンやコーヒーを配布するかというと、例えば日本の場合、駅等で党員の人が演説をすることがあると思うが、近づき難い雰囲気がある。一方、北欧の選挙小屋では、コーヒーやジュースを勧めることで、通りかかった人の気持ちも緩まり、おしゃべりが始まるきっかけとなる。
- ・自治体選挙は3年以上住んだ移民も投票できるため、政策をいろいろな言語で記載したパンフレットを用意している。国政選挙はノルウェーのパスポートを持ってないと投票ができない。
- ・首相のイラストのバッチやノルウェーの国の形の反射板（冬は暗くて歩行者が見えないため身に付ける）、シャボン玉、日焼け止め等が配布されている。
- ・大学のキャンパス内や町の各地に事前投票ができる場所（コンテナのような箱）も設置される。
- ・投票方法は、政党だけを選んで投票することもできるが、自分の考えに近いため推したい候補者がいる場合は、候補者個人名の横にチェックを入れることもできる。政党が当選の順番を決めているが、候補者は個人票の獲得数によって、政党が決めた順位を繰り上げることができる。

Q 投票用紙を見ると、地方議会選挙にかなりたくさんの方が立候補しているように伺える。

A 60～70人ほどが立候補している。

- ・ 比例代表制について、政党に投票するのを意識する場合と、特定の人に投票することを意識する場合がある。拘束名簿式と非拘束名簿式がある。
- ・ 名簿に誰の名前が載るか、人々は普段から気にしている。選挙の1年前から各政党から名簿を公表する。

Q 人々は思想や政策について議論しているか。

A 北欧は政党が多すぎることで、また各政党の考え方が近いという面もあり、決めるのが大変である。そこで、人々はメディアが公表しているポートマッチ（いろいろな質問に答えることで、自分の考えに近い政党を導くもの）を使っている。さまざまなメディアが公表しているので2～3個使ってみて結果を比べる等している。友人同士でポートマッチの結果の話もしている。ポートマッチの結果はあくまで参考であり、選挙小屋で話をしたり、家庭で話したりすることでどの政党に投票するか自分の考えを固めていく。

- ・ 選挙や政治の話をするのはたいてい社会科の授業。生徒は教科書や黒板は見ず、先生は机に座り、先生の名前は呼び捨て、といった気軽な雰囲気で行っている。
- ・ 主権者教育が教室の外で行われている事例として、社会科の授業の宿題のために、小学生が選挙小屋に行くこともある。グループになって、質問を考え、もしくは先生が質問を用意することもあるが、実際に選挙小屋に行き、政党に質問を投げかけるというもの。どの選挙小屋に行くかは、国会や市議会に議席を持っている政党に絞る。各政党の選挙小屋で同じ質問を投げかけ、その質問の答えをまとめ、プレゼンをして議論するといったことを行っている。
- ・ 暗記型ではなく、自分とは異なる意見に耳を傾ける訓練がなされている
- ・ 他には、意見の違いで生徒が席を分かれて（教室内で左右に分かれて向かい合って座る）、税金等について意見を出し合う事例もある。
- ・ 高校は有権者である18歳がいる。例えば、ノルウェーの場合、選挙のある年に18歳になる人は、その年に行われる選挙に投票することができる。そのため、高校の社会科の先生にとっては、選挙について教えることが重要な課題である。
- ・ 学校で模擬選挙も行われる。模擬選挙の事前段階で、各政党の青年部（10～20代）の代表がそれぞれ学校に呼ばれ、青年部の代表者は若者に分かりやすい言葉遣いで政策の議論をする事例もある。
- ・ 若者にとって特に身近な政策である学校政策（スクールポリティックス、例えば保健室の先生を増やす、メンタルヘルス対策をいかにするか、等）を中心に議論が行われる。社会科の授業の一環として体育館に集まり生徒皆で青年部の議論を傍聴する。
- ・ 若い人たち（青年部）が若い人（学生）のために政治を上手に説明している。この議論を見終わった後、社会科の授業で話し合い等を行う。

- ・体育館等で各政党が議論した後、校庭に「学校広場」というものが作られていることがよくある。学校広場とは、政党の青年部員が校庭にスタンドを作った、その空間の名前であり、選挙小屋の学校版である。配布物の中にはコンドームも用意されていた。
- ・模擬選挙の会場前では、音楽をかけてDJを配置したり、ダンスをしたりしている。政治や選挙は楽しめるものだとすることを、学生の中から実感できるようになっている。
- ・投票記載台はダンボールを使った学生の手作りである。票のカウントも学生自身で行う。

Q 模擬選挙を通じて、自分たちで社会を変えていけると、子どもが実感することができていると思うか？

A ノルウェーでは模擬選挙は文化として浸透している。学校に呼ばれる青年部員は将来議員になる人もいる。政治家や政党が身近で、実際の政策の説明を聞くことができる。模擬選挙を通じて、選挙を学生自身でつくっていくことは、積極的に政治に関わっていく姿勢を育むことにつながっていくと感じる。

- ・選挙当日は政策の宣伝が禁じられている。
- ・ノルウェーの新しいデザインの投票箱と記載台は発表されて数年が経つ。ノルウェーの国立美術館に行くと、北欧デザインの歴史の一部として紹介されている。例えば、車椅子の方でもカーテンを自分で引きやすいような形にデザインされていて、民主的なデザインとして評価されている。

<デンマークの選挙期間の様子等>

- ・デンマークでは投票箱が共通しておらず、自治体によって異なっている。また、デンマークの投票用紙はサイズが大きく、投票箱として、投票箱用に少し改造したゴミ箱を使っている自治体もある。
- ・投票所に子どもを連れて行く方が多い。実際に投票する様子を子どもに見せることを伝統としている家庭が多い。子どもは、実際に母親がどうやって投票するのかを幼い頃から自然に見て、学んでいる。
- ・選挙期間中の写真から、柱に選挙ポスターが貼ってあるのが分かると思う。
- ・デンマークは選挙ポスターの文化がとても強い。選挙ポスターを街中に貼っている光景はデンマーク独特である。
- ・立候補者がパンケーキを作って配布し、通りすがりの市民に聞きたいことはないか、と話しかけていることもある。

Q さまざまなものを配れる、資金にアドバンテージのある候補者が選挙に有利か？

A 保守党が最も資金が豊富であるため、圧倒的に配布物が多い。不平等ではないか、という議論が起こらないので、その点がすごいと感じる。配布物によって投票先を左右されないという意識が人々にあるため、さまざまある配布物が問題視されていないのではないかと考える。

- 大学のキャンパスに現役の大臣が赴き、政党のパンフレットを配ることもあるほど議員が身近である。
- デンマークは選挙ポスターの貼り方やサイズ、デザインに決まりはなく、自由である。国民は選挙ポスターの多さに違和感を感じることはなく、そういうものとして自然な形で浸透している。ポスターをコレクションしている人もいる。デザイン性が高いポスターは表彰されたり、美術館に保存されたりもする。
- 選挙期間中、フレデリクセン首相の青年部のイベントでは、気候対策として、ファッションの政策も見直していかなければならない（ファストファッションの問題等）ということで、ヴィンテージの服や今ある服を大切に使うことを促すファッションショーを開催し、当時人気だった議員や政治家もイベントに参加していた。
- 青年部はプラカードづくりをすることもある。写真は気候パレードに参加する際のプラカードポスター作りの様子だが、プラカード作りを通してメッセージを書くことは主権者教育であると感じている。いろいろな団体や青年部、環境団体等が、それぞれ集まって皆でプラカード作りをしている。メッセージを自分たちで考えて、文字にして、イベント当日に持って歩くこと自体が主権者教育の一部になっているのではないかと感じる。プラカードは話し合いながら作っている。思いを言葉にするのは、政治を自分の中に取り込む作業の一環だと感じている。

<スウェーデンの選挙期間の様子等>

- 選挙期間中は、市民広場やショッピングモール等に首相レベルの政治家たちが来て一生懸命スピーチをしている。有名な政治家が来る時には写真のように選挙小屋やスタンドを立ててお祭りのような雰囲気をつくる。写真はスウェーデンの駅前の選挙小屋の風景。
- 議員の中には、子どもを連れて、育児をしながら市民と話している方もいる。
- 環境政策や農家のサポートが大事だと主張する候補者は農家が育てた野菜を選挙小屋に置いて展示していた。また他の候補者には、北欧の人が好きなサンドイッチを配ったり、リップクリームを配ったりしている人もいた。
- 有名な議員や党員が集まるイベント会場は、写真のように周りをお祭りのような雰囲気にして、子育て中の母親や父親が寄りやすいように子どもが遊べる場を作ることも当たり前になっている。
- 子どもが遊んでいる間に親は議員のスピーチを聞いたり、議員と話たりできるので、こういった取り組みは評価されている。写真は子どもにフェイスペインティングをしている様子。
- 選挙期間中は主張を訴えるパレードのようなものが開催されることがあるが、親に連れられて参加している子どももいた。
- 写真はスウェーデンの社会民主党の投票用紙。スウェーデンの投票で特徴的な点は、他の国は国政選挙と自治体選挙は異なる年に実施するが、スウェーデンは同日に、国政と自治体の選挙を同時に行う。投票用紙も、国用、県用、自治体用、と分かれている。

- ・写真は投票会場前の様子だが、市民は犬の散歩の途中で来る人が非常に多いため、係の人に犬を預ける光景もよく見かける。何かのついでに投票所に来ている人が多い。

<フィンランドの選挙期間の様子等>

- ・フィンランドの選挙期間中は選挙ポスターではなく、旗をよく見かける。
- ・投票先を考える際には、その党全体の多様性を北欧市民は見ている。ジェンダー、年齢、スーツを着ているのか、服装が自由なのか、女性が多いか、白人ばかりになっていないか、若い人がいるか、といった視点を持ってチェックしている。
- ・フィンランドの場合、その政党に投票するというより、その政党の中の誰かに投票することをすごく意識しなければいけないシステムになっている。
- ・投票は、その人の名前ではなく、立候補者番号を記すようになっている。
- ・写真は、フィンランドの選挙小屋の空間。大抵、中央駅の周辺や大きいショッピングモール周辺に選挙小屋の空間をつくっているため、何かのついでに人々が立ち寄りやすい場所となっている。この空間は、1党だけでつくるのではなく、ほぼ全党でつくる空間を選挙小屋と呼んでいる。市民が政党の比較ができるように、1党だけでスタンドを立てて選挙運動をしようとはしない。対立する政党同士でイベントを企画することもある。
- ・フィンランドとスウェーデンでは植物の種の配布を見かけることが多いように感じる。写真は、フィンランドの国政選挙があった時に集めた配布物だが、コースター、ペン、マッチ、キャンディ、ハンカチやバッチ等さまざまあった。
- ・写真は、選挙小屋ではカフェのようにコーヒーを飲みながら 北欧の政治についての「議論」ではなく、「おしゃべりができるカフェ空間」であることを表しているもの。
- ・選挙小屋はカフェのような場所であるため、市民が待ち合わせ場所に使っていることもある。その政党を支持するかは関係なく、ヒーターがあるから、コーヒーがあるから、という理由だけで座り、皆おしゃべりをしている。

Q 選挙運動は対面がメインか。オンラインも活用しているか。

- A オンラインももちろん活用している。Instagram と Facebook をよく使っている印象。最近 は tiktok の活用も伺える。tiktok は若い世代のチャンネルであるため、青年部が活用し、大政党は、Facebook や instagram を活用している。Twitter はあまり使われていない様子。ただ、対面の場もとても大事にされる。特に地方では、対面を大事にする傾向が強い。
- ・フィンランドの選挙当日は政治の話はしてはいけない決まりがあるが、コーヒー等を配布するのはよい。
 - ・写真は高校の社会科の授業の様子。選挙期間中だったので、選挙局の公式ホームページを見ながら各政党の政策の違いについて勉強をしている様子。
 - ・具体的には、生徒をグループに分けて、各政党の担当を割り振り、発表資料を作るよう指示をする。そして、生徒たちはインターネットを使いながら各政党の公式ホームページを見てロゴの色や政策を調べて、右寄りなのか左寄りなのかリベラルなのか、保守的なのかということも調べたりして、自分たちで発表資料を作っていく。いかに授業がデジタル化されている

るかの一例でもある。紙の教科書はあるが、実際の教育現場では使われていない。昨日のニュースや政党のホームページを実際にインターネットで閲覧することを教材としている。事象ベースの教育と言われている。今実際に起きていることを元に社会や理科の授業を進めていくのが北欧の教育スタイルである。

- ・学校での模擬選挙の様子だが、やはり自分たちで作った投票箱を使っている。すべて手作りである。他の北欧諸国とも共通しているのが、先生は基本的に指示をしない点である。生徒にどうすればよいかを言わない。「どうしたらいいか皆で考えてやっごらん」という姿勢で接している。

<アイスランドの選挙期間の様子等>

- ・写真は大学の中の様子。アイスランドで人気の政党は、他の北欧諸国と比べて政治の傾向が異なり、海賊党が非常に支持されている。写真は海賊党が大学のカフェテリアでパンフレットを配り、大学生に「質問はあるか」と話しかけている様子。こういった行為に大学の許可を得る必要はない。北欧では議員が自分たち（学生）に会いに来てくれる。

Q 外国人、移民、難民、障害者の方、知的障害も含めて、こういった方たちが政治に参加しやすいような環境に関心を持っているセミナー視聴者が多い。講師が今、取材等を通じて感じているところをお話しいただけるか。

A 今、北欧各国では、極右政党が支持率を伸ばしている。欧州全体で難民の波が来た時以前から北欧は極右政党がある程度支持を得ているという特徴があった。北欧は極右支持者だと公では言いづらい空気がある。北欧の人は自国の福祉制度が大好きだが、今後、恐らく、制度維持はできないだろうと言われている。その理由として、移民がどんどん入ってきて、もし移民が労働者になって税金を払わないケースが続いた場合、今の北欧の制度が維持できなくなると考えられているからである。そのため、北欧の制度が維持できなくなることを恐れている人が多い。それを公に話すと差別主義者だと言われるかもしれないため、公には言わずにこっそりと極右政党に投票する傾向がもともとあった。その一方で、民主主義的な社会は北欧の人たちのアイデンティティでもあるので、やはり外国人や移民の人たちがいないと社会は成り立たない、だから皆で話し合って受け入れていこうという空気もある。その中でも、選挙権があったとしても移民背景のある人たちの投票率は低い。そういった人たちにどのようにコミュニケーションをとって政策を知ってもらえるか。ノルウェー語だけの発信では足りないため英語等で発信しなければならないという意識が政党にはある。障害者の人が投票しやすいように、病院や高齢者の施設内でも投票でき、ベッドから動けない人はその病室内で投票できるようにすることもある。そういった対応を周知するためにFacebookで自治体が宣伝広告を出していたりする（Facebookは高齢者ほど使っている印象）。

Q 外から自国を見ることで、初めて主権の意識が出てくるのではないかといったメッセージをいただいている。自分を外に置いてみるといったことについて、若者へのメッセージが欲しい。また、8か国語を使ってご活躍されていることについて、母語でない言葉を使って、海

外で活動されている中で意識していることはあるか。講師のご経験を踏まえて何かメッセージをいただければ。

- A 日本にいた頃は選挙や政治に全く興味がなかった。その時の自分を今でも忘れないようにしている。なぜ今私がこういった取材を行っているのかというと、最初は文化やファッションショー、音楽祭、食のフェスティバル等の取材をしていたが、なぜか取材先ではいつも議員や大臣が来ていた。ファッションショーの1列目に文化大臣が座っているような状況が当たり前の光景。そこで、この国を全体的に理解するには政治を取材しないといけないんだなと思い、選挙の取材をするようになった。取材をしていると、極右政党含め、どの政党の人も外国人の私に一生懸命説明してくれるし、若い人のことを大事にしていることに感動した。北欧では女性を大事にするということは有名だが、北欧が若者をこれほど大事にしていることを知らなかった。自分が北欧のような環境で育ったら全然違った自分になったと思い、それを意識しながら取材・勉強をしている。言語については、もともと言語が好きで、海外で生きていく上で言語というのは自分を守ってくれるもの。なので、言語に対してネガティブな感情はない。選挙を取材する上で言語はやはり大事である。現地の選挙特番の理解、政党のプレスリリース、記者会見等をすぐその場で理解するためにも必要で、私は選挙の取材がもっとしたいからというモチベーションで言語習得ができています。それに加え、幼い子どもや地方に住んでる高齢者の方は英語が必ずしも得意という訳ではない。そういった場面で初心者レベルでも現地の言葉が話せるとインタビューができる。それが自分の強さになっている。